

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

阪神大震災緊急アピール P 2
ビデオをよろしく！ P 7



阪神大震災の被災地で高校生・大学生などが救援活動に積極的にとりこんでいます。緊急アピール（2P参照）に応じて、この日は中宮寺門跡・日野西光尊さんなどが義援金と救援物資を携えて「芦屋市民学生救援隊」を訪れ緊急活動に参加、村時義正さんは豚汁1000食など大量の物資を届けられました。

1995・1
33

阪神大震災緊急アピール

1月17日の阪神大震災によって、神戸を中心に多数の犠牲者が出、都市機能が崩壊しました。被災地のみなさん、なんとしても生き抜き、亡くなった人たちの無念をも力とし、旧に復するのではなく、根本からのやりなおしのために、ともががんばりぬきましょう！

会員のみなさん！読者のみなさん！
阪神大震災の惨状をみて、すぐにもなにかをしたいとお考えのかたが、たくさんおられると思います。

私は1月19日、中心的な被災地のひとつ芦屋市に、救援物資の輸送を依頼されてでかけ、感動的な光景にであいました。

10数名の若者が集まり、翌日からの救援活動の相談をしているのです。その青年たちの多くも被災者です。なかには家族を亡くし、その遺体を家に置きながら、この場に参加している人もいました。

そのとき、母一人子一人の女子学生の母親が亡くなったという報せがはいり、2人の若者が自分の家に引き取るという、飛びだしました。

彼らは「芦屋市民学生救援隊」を結成し、20日の朝から、被災者が集まっている付近の公園や小学校などを巡回し、その人たちがなにを必要としているかを聞いて集約し、届ける活動を始めました。高校生・大学生などが続々とつめかけ、たちまち100名を越え、きわめて精力的に活動しています。ほんとに短いあいだに自分をきたえ、顔つきまでしっかりしてきているのには感心しました。

家族を亡くした青年と話をしましたが、彼は、家にいたら滅入るだけだが、こうやってほかの人のために活動することで、自分自身も救われる、と語っています。

彼らは芦屋市と神戸市東灘区の青年たちで、通行可能な道路などをよく知っており、被災者の集団には同級生や知りあいがいます。彼らの働きで、もっとも必要なところに、もっとも必要なものを、すみやかに届けることができます。

また地元の若者たちがこうやって働きだすことが、被災者たちになよりの励ましになります。私も宝塚で被災

しましたが、彼らの活動ぶりをみて励まされ、よし、自分にできることをやろう、と気持ちを引き締めることができました。

この活動を京都の「あをぞら救援隊本部」(075-415-3190)尼崎の「尼崎市民救援隊」(06-412-2105)が最初からバックアップし、さらに神戸市東灘区の「上山小児科医院」(東灘区田中4-1-1)での救護活動とタイアップしてすすめられています。

お電話やファックスで、緑の地球ネットワークまで義援金を約束していただければ、その分を先に立て替えて、必要な物資を購入して届けますので、可能なご協力をお願いいたします。後日、会計報告をいたします。

またこの活動に加わっていただけるとは、ぜひ、現地につけてください。

――以上の内容のファックスを20日から各方面に送ったところ、さまざまの物資をもって、すぐ現地につけられたかた、義援金を送ってくださったかた、ファックスを知りあいに転送してくださったかたなどがびっくりするほどたくさんおられます。また各所でいろんなNGOの活動がめざましいこと、緑の地球ネットワークの会員がいたるところで活躍しておられるのを知り、私はまた感動しました。

被災地は依然として厳しい条件下にあり、余震や病気の問題などが心配です。このような活動はかなり長期に必要とされます。さらに多くのかたのご協力をお願いいたします。

【連絡先】

芦屋市民学生救援隊 (山田隆博代表)
芦屋市宮塚町17-3 池本ビル201
0797-34-0471 or 030-829-7548

電話が通じにくければ、緑の地球ネットワークまでご連絡ください。

緑の地球ネットワーク

大阪市港区市岡元町3-9-16 西建ビル

TEL. 06-583-1719 FAX. 06-583-1739

[銀行口座] 池田銀行梅田支店 普通預金 2282952 緑の地球ネットワーク 高見邦雄名義

[郵便振替] 00940-2-12846 緑の地球ネットワーク

送金は地震救援の義援金であることがわかるようにしてください。

1995年1月24日

緑の地球ネットワーク

世話人 高見邦雄

大同からのお見舞い

尊敬する高見邦雄さん、緑の地球ネットワーク会員のみなさん

テレビの報道をつうじて、日本の神戸市とその周辺地域で大地震が発生し、日本の人民の生命と財産に巨大な損失を与えたことを知り、驚愕しています。きょうはまたそちらとの連絡で、高見さんはじめ緑の地球ネットワーク会員のみなさんもさまざまな被害をうけておられることを知って、私たちの気持ちは穏やかではありません。これはたんに日本人民の損失であるだけでなく、世界の人類の損失だと思えます。私たちは大同市青年連合会と、緑の地球ネットワークに支援されているすべての農民・学生とを代表して、みなさんに心からの慰問の意を表します。

大地は無情です。しかしみなさんが政府のリードのもとに災害にうちかち、かならず復興されるであろうことを、私たちは信じています。地震災害とのたたかいのなかで、緑の地球ネットワークの組織が必要とすることがあれば、私たちは最大の努力を傾けてそれに応えたいと思っています。さしあたり、私たちはこれまでに倍する努力をして、私たちの共同の事業のために、努力奮闘いたします。

1995年1月19日

大同市青年連合会主席 部 向 華
大同市青年連合会副主席 祁 学 峰



第2回会員総会のお知らせ

突発的な大震災で、まだ混乱がつづいていることと思いますが、第2回総会を、予定通り2月18日に開催いたします。

中国山西省の黄土高原における緑化協力は、この3年間に予想以上の急ピッチで発展してきました。

ネパールでの協力は佐野さんにゆだね、ネットワークの組織としては一時見送らざるをえません。

北海道の二風谷におけるナショナル・トラスト『チコロナイ』（アイ

ヌ・シサム友好の森）は、昨年末に順調なスタートを切ることができました。

私たちの足元で大災害が発生しましたので、大きな困難を抱えましたが、このプレッシャーを力に変えて、絶対に後退させることのないよう全力をつくしたいと思います。

この3年間の活動を再確認し、新しく態勢を強化するために、たいへん重要な総会です。一人でも多くの会員みなさんにご出席くださるようご案内いたします。

●日時 1995年2月18日（土）

午後1時～5時

●会場 クレオ大阪西
（JR大阪環状線「西九条」）

●スケジュール

13:00 ビデオ「黄土高原に緑を！」

13:30 討論「緑の地球と私たち」

15:30 第2回会員総会

17:00 終了

後世の子孫に幸福をもたらす偉大な事業

中国山西省青年連合会秘書長・緑色地球ネットワーク山西合作弁事所主任 席小軍

ワーキングツアーのメンバーもお世話になった席小軍さんが、昨年末、研修で岐阜県の糸貫町に来られたので、新年の挨拶をいただきました。



昨年末、来阪した席小軍さん（右から2人目）と。右端は青山英治さん（P4参照）。

中国の山西省は、大陸の内陸部に位置し、太行山と黄河中流域の渓谷にはさまれた、総面積15.6万平方kmの地域です。

山西省は古来、中華民族の輝かしい黄河文明発祥地のひとつでした。

ここ十数年来、山西省の経済建設は活発におすすめられ、大きく社会が発展し、進歩をもたらし、人々の生活水準も著しく向上しました。山西省は資源が豊富ですから、さらに現代化が進み、エネルギー重化学工業の発達した地域となることでしょう。

しかしながら、山西省の経済発展の過程において、解決をせまられている問題もたくさんあります。なかでも重要な問題が、「環境保護」なのです。

山西省の地形は、ほとんどが黄土に覆われた起伏の激しい山地・高原で、「山西高原」と呼ばれ、黄土高原の一部です。黄土高原には植物が少なく、水土流失が厳しいため、山西省の経済発展と、人々の生活水準の向上に影響を及ぼしています。政府や人民が生活環境の改善にたいへんな努力をして、ある程度の成果はあげているものの、依然として環境問題は手におえない難題として私たちを悩ませています。

黄土高原を緑にすることは、黄河流域の何代にもわたる人々が奮闘してきた、ぜひともかなえたい夢なのです。

1992年の初めに、日本にある国際的な民間組織、緑の地球ネットワークが、山西省青年連合会と協力して、黄土高原に緑をもたらす、約20年の歳月を要するすばらしいプロジェクトをはじめました。

この3年間で、緑の地球ネットワークは日本の関係機関と国際社会の大きな援助、そして各界の人々の多大な支援をえて、計180.8万人民币の緑化基金を集めました。山西省の大同県、渾源県、靈丘県、広靈県、懷仁県などにつくった計7200畝の地球環境林に140万株以上の木を植え、農村の小学校6か所に総計720畝の“希望果樹園”をつくり、緑化活動は一定の成果を収め

ています。

緑の地球ネットワークは国境にとらわれず、世界的な視野で、未来に目を向け、地球の自然生態環境の改善のために努力を惜みず活動されています。彼らのこの類をみない開拓精神、そして理想の実現にかけて活動される姿には深い感動を覚えます。彼らの国境にとらわれず問題を共有する精神が、子孫に幸福をもたらす偉大な事業をつくることには敬服の念を感じずにはいられません。私は山西省の800万の青年を代表して、緑の地球ネットワークで活動されているみなさまに心からの感謝の意を表し、この事業にかかわり、支援して下さる各界のみなさまに崇高なる敬意を表します。

ワーキングツアーに参加される日本の青年たちや山西省の青年たちが、荒涼たる黄色い大地に一株ずつ植樹していった木々が芽吹くのを見るたび、私は感動を覚えずにはいられません。この木々は中国の青年と、世界の青年との友情の証として永遠に青く萌え続けるだけでなく、青年たちの共通の願い—黄土高原が早く緑に覆われますように、美しい世界の実現に万歳！—の象徴として心に刻み込まれてゆくことでしょう。

ビデオ『黄土高原に緑を！』

VHS・カラー 28分
GEN会員価格：3500円
一般価格：5000円（送料390円）

ビデオ「黄土高原に緑を！」の普及活動が動きだしたところで、阪神大震災に遭遇してしまいました。

昨年末に、大阪府教育委員会推選、大阪国際平和センター推薦が、1月23日には文部省の選定がきまりました。

個人でみていただくのもありがたいですが、小・中・高・大の学校、図書館、公民館など、公共施設のビデオライブラリーに購入してもらおうと、よりたくさんの、若い人たちにみてもらうことができます。住んでおられる地域の施設に購入を働きかけてくださるようお願いいたします。

1月17日の朝日新聞、そして読売新聞などで大きく報道されましたが、大震災に埋没しましたので、ぜひよろしくお願いいたします。

青少年にグローバルな視点を 岐阜県系貫町 青山 英治

黄土高原をはじめ知った驚きは、言葉では表現できないほどでした。

私の住む岐阜県本巣郡系貫町では、国際青年年の1985年から“青少年海外派遣事業（若い翼）”として町内の青少年を中国へ派遣し、その年の11月に中国青年訪日友好の船（文部省が招聘し、日本青年団協議会が受入れ）の第5代表団のうち10名（山西省青年）を本町青年団が受け入れたことから、1986年から山西省青年联合会との青少年友好交流が行われ、ついに10周年を迎えるに至りました。

現在研修生として来町されている山西省青年联合会秘書長の席小軍氏を通じて高見さんを、GENを知りました。

高見さんから聞く山西省とりわけ大同の状況は、想像を絶するものがあり（聞くだけでこれぐらいすごいものだから現地を訪れたときの驚きは、想像を絶するものであろう）、特に人口の8割が農村地区という事実は、10年来青少年の友好交流をおこなってきた幅の狭さを反省させられました。

山西省のさまざまな生活環境を知り、植林を通して地球環境問題に取り組む

ことができる素晴らしさに感銘し、自分たちも参画することができれば、より多くの観点から本町の青少年をグローバルな視点から育成することができると考えています。

多くの人に見てもらいたい 福井県敦賀市 打它 繁彦

「黄土高原に緑を！」のビデオが送られてきて、早々に見せていただきました。私も昨年の春のワーキングツアーに参加させていただきましたが、誇張したところもなく、ありのままの真実を伝え、それでいて見ている人に感動を与えるものであると感じました。

春のワーキングツアーで起工したヤオトンが、完成間近となっており、今度参加できる機会があれば、泊まることのできるのを楽しみにしています。

春は、黄色一色の黄土高原、山頂付近まで開墾された畑、無数の侵食谷、日本では考えられない光景です。私も山に植林をしますが、定まった面積に100本植林をすると、ほとんどが育ちます。10年、20年と経るなかで間伐をしていくのですが、雨の少ない黄土高原では、活着率が悪く、木が育ちにくい環境となっています。

しかしビデオの小老樹のように、うまく成長はしなかったけれど、肥沃な土地を残してくれます。木が育ってくることが大事ですが、育たなかったとしても何かを残してくれます。黄土高原に緑を回復するには大変な年月を要しますが、一生懸命努力をしている現地の人たちと共に、細くても息の長い努力をしていきたいものです。

小学校の果樹園の植林の時、手にマメをたくさん作りながらも、一生懸命穴掘りをする子どもたちや、家にある水を運ぶことができるものを持って、年齢に応じて水を運んでくれた子どもたちのことを忘れることができません。

今回のビデオを、学校の環境問題の授業に見ていただきたいと、子どもの学級担任をお願いしております。このビデオをより多くの人に見ていただき、

黄土高原への関心を持ってもらえるよう努力したいと思っております。

『黄土高原に緑を！』を見て 大阪府豊中市 前川 恒子

黄土高原の広さ、緑のない山肌をむき出しにしたありさま、土砂流出の激しさ。これが黄土高原だ！という迫力のある映像でした。

かつては文明が栄えた豊かな土地であったことが、5万体の仏像が彫られている雲崗の石窟や、高い山にへばりつくように建てられた懸空寺、荒野に残されている犬の彫刻等の紹介を通して語られています。

雨が降れば大洪水。川は濁流となり、村々を寸断し、作物も家も流してしまう。また、年間降雨量が200mmにも充たない時もある。食べ物がなく、トウモロコシのスープで飢えをしのぐという生活の厳しさ。中国のもう一つの顔を見せられたような気がしました。

このような所を、本当に、一面の緑で覆いつくせるのだろうか？ 夢のまた夢では？ でも、松の苗木が凍える季節を何度も通りこし、少しずつ大きくなっているのを見ると、実現可能な夢にも思えてきました。植林への子どもたちの協力もほほえましかったです。それぞれが家から持ってきたコップや洗面器等で、水を苗木に注いでいました。木を育てることは、次代をなう子どもを育てることと、重なっている思いがしました。

ワーキングツアーに参加した人たちの笑顔が素敵でした。現地の人たちと協力し合いながら、苗木を植えたり、左官屋さんになってヤオトンを建てたりしていました。

私も1本購入して、家族や友達に見てもらいました。“協力する”と言って、先生やPTAの役員の方が買っていただきました。大阪府教育委員会の推選を受けたとのこと。学校では、国際協力、環境教育の教材として、充分活用できる内容だと思いました。



成果上げる植樹運動

草 陽 一 (朝日新聞編集委員)

93年春のワーキングツアーで山西省を訪ねた朝日新聞編集委員の草陽一さんが、朝日放送の『朝日新聞の声』という番組でGENの活動をアピールしてくれました。

地球の緑化が叫ばれています。東南アジアの熱帯林の乱伐に歯止めをかけて、緑の回復を図らないと、地球の砂漠化はさらに進むでしょう。森林の保護や緑化運動に世界的規模で取り組まなければ、地球の砂漠化に拍車をかけることは間違いありません。中国西部の黄土高原もかつては、緑が豊かだったと言われていますが、いまは春になるとわが国にも黄砂を降らす源になってしまいました。

この黄土高原に緑を取り戻そうという運動を、大阪のボランティア団体が進めているのをご存じでしょうか。大阪市港区に本部がある「緑の地球ネットワーク」です。つまり、グリーン・アース・ネットワーク、この頭文字をとってGENと呼んでいます。1993年に正式に発足したばかりですが、これ

までに植樹のワーキングツアーを12回実施して、140万本の植樹に協力しています。来年春にも2回にわけてツアーを組み、植樹は241万本にのぼる見込みです。

私も去年春のゴールデンウィークを利用して植樹ツアーに参加したひとりですが、現地の人々がとても温かく迎えてくれました。黄土高原は雨期の農地流失がひどくて、砂漠化が広がっています。年間の降雨量は約400ミリと少ないうえ、その8割が7月から9月にかけて集中的に降るために、土砂の流失が止まらないのです。木が1本も生えていない荒れた大地に、幅が数十メートル規模の亀裂が何本も走っています。だから、少しでも木を植えて自分たちの環境と農業を守ろうとしているのです。そして、国境を越えた緑化

協力に大きな期待をかけています。

私のまわりには、「砂漠で木の苗を植えて、はたして根付くのか」と不審がる人もいますが、現地のプロの人たちの指導を守って、ていねいに植えると、根の活着は平均で70%以上と、予想以上に良いことが分かっています。しかし、地域ごとの地質、その年の降雨量、苗木の大きさ、種類によっても差が出るようなので、悪い条件が重なると難しい面もあることは否定できません。

植樹協力の資金は会員らのカンパや、郵政省のボランティア貯金、地球環境基金などの支援によるもので、これまでに3500万円分が援助されました。小さな苗は1本が1円で買えます。みなさんのささやかな善意で、黄土高原の緑化が進めば、と願っています。(朝日放送1994年12月13日放送分)

地球環境基金 追加助成決まる

黄土高原緑化協力のたいして、環境事業団・地球環境基金の助成を昨年度からうけていますが、94年11月初め、加藤久和・地球環境基金部長など3名が現地調査をされました。自然環境の厳しいなか、私たちの協力がりっぱに前進していることに感心したとのことでした。

94年度は当初560万円の助成が決まっていたのですが、このたび、緑色地球ネットワーク大同事務所(所長=祁学峰・大同市青年連合会副主席)が管理その他に使用する車両の購入費用200万円の追加助成が決まりました。今後、より効率的な管理が可能になると、現地はたいへん歓迎しています。

大阪コミュニティ財団から 助成

大阪商工会議所を中心に運営されている大阪コミュニティ財団から、黄土

高原での緑化協力のたいして、昨年度にひきつづいて30万円の助成をいただきました。大同市南郊区平旺村に建設する中心プロジェクト「地球環境林センター」の建設費にあてることになっています。

国際ソロプチミスト奈良 4クラブ助成継続

国際ソロプチミスト奈良4クラブから、今後、5年間助成を継続するというので、94年度分の助成をいただきました。昨年度に助成をいただいた小学校果樹園の建設にたいして、大同市青年連合会は、国際ソロプチミスト奈良4クラブを、学校に行けない子どもたちの就学保障を中心にとりこんでいる「希望プロジェクト」の模範として、表彰しています。



春の黄土高原 ワーキングツアーの お誘い

農村に泊まったり、小学校付属果樹園で子どもたちといっしょに汗を流したり。GENのワーキングツアーならではの体験が、あなたを待っています!

●日程

A班 3月26日(日)～4月4日(火)

B班 4月7日(金)～4月14日(金)

※関西新空港発着

●費用

どちらも22万円(航空運賃、中国での宿泊費/食費/交通費、ビザ取得手数料、GENの会費1年分を含む。学生21万円)

※会報31、32号では21万円とお知らせしていましたが、航空運賃の都合で22万円とさせていただきます。どうぞご了承ください。

●申込み締切り

3月4日(土)

順調なすべりだし！ナショナル・トラスト運動

チコロナイ (アイヌ・シサム友好の森)

武田 繁典 (高校教諭・GEN世話人)

1992年の末、GEN会員の石原忠一さんからの提起で準備がはじまった『チコロナイ』の運動が、昨年12月10日に開始されました。

1993年が、国連の『国際先住民年』で、昨年12月10日からは『世界の先住民の国際10年』がはじまっています。

『チコロナイ』の運動は、本来はアイヌモシリと呼ばれた北海道の地で、頑張っているアイヌ民族の方がたと私たちが、森林回復の活動を中心に共に活動していこうという『世界の先住民の国際10年』にふさわしい運動だと思います。また、木を育て、森をつくる運動ですから、ゆっくり着実にすすめ、10年後に評価されるようなものにしていきたいと思っています。

今までに、呼びかけのビラを、大阪のコンサート(セレブレーション・コンサート'94)と東京の集会(アイヌ民族の権利回復をめざす集い)で約1500枚配り、『緑の地球ネットワーク』の会員を中心に約2000枚郵送しました。

新聞では12月10日の北海道新聞、読売新聞(北海道)、毎日新聞、17日の読売新聞(大阪)、22日の京都新聞に掲載されました。

その後も、新聞を見ての問い合わせや、取材の申込み、ミニコミ誌で紹介したい、一緒に活動したいという申し出などが続いています。

募金の呼びかけにこたえて寄付を寄せてくれた人は78人(1月10日払い込分まで)、合計金額で1,776,280円になります。一人の寄付額は500円から最も多い人で746,250円。この方は匿名希望で、メッセージの内容から、冬のボーナスをそっくり送ってこられたようです。はじめは自分の目を疑いましたが、本当とわかると、事の重大さというか、こうしてお金を受け取った側の私たちの責任の重大さを思い知らされました。

もちろん小額の方も、それぞれの思いをこめて貴重なお金と時間をさいて

送金してくださったものと思います。現地世話人の貝澤耕一さんは準備の中で、「このナショナル・トラストの運動で山を買い、森林を回復していくのはもちろん大切ですが、それより、この運動をつうじて、一人でも多くの人、アイヌの人びとのこと、過去500年の歴史の結果として今のように暮らしているのか、将来をどう考えているのか、に心をよせるようになることのほうが大切」という意味のことを言っていました。寄付金額の多少にかかわらず、一人一人の思いを大切にしたいと思っています。

そういう意味でも、寄付だけでなく、この運動に対する意見、疑問点、質問、提案などをどしどしお寄せくださるようお願いいたします。運動に参加する一人一人がお互いに顔の見える関係を作りながら、長続きのする運動にしていきたいと思っています。

第1期計画が3月末までで、目標が300万円なので、このまま行けばあと一歩で達成されると思います。『緑の地球ネットワーク』の会員の方がたも、『チコロナイ』でつながった方がたも、もう一度呼びかけのパンフレットと資料を見て、寄付金の多少にかかわらず一人でも多くの方がこの運動に心をよせて、つながっていけるようにご助力くださるようお願いいたします。

今後の予定では、3月末に二風谷へ行き、土地買い取りと保全契約を具体的に進め、4月以降の第2期計画を立てる相談をすることになっています。

8月には、昨年に続き、第2回目の現地ワーキングツアーを行います。また、おりにふれ、この問題に関する講演会、勉強会なども計画しようと思っていますのでどしどしご参加ください。

2月18日の『緑の地球ネットワーク』総会に貝澤耕一さんが来られてアピールをします。その夜には別の欄に案内が載っている『エスニック・コンサート OSAKA』に参加し、その後、交流

会も予定しています。詳しくは事務所に問い合わせてください。

『チコロナイ』関係の寄付は、郵便振替 00900-2-5202 チコロナイ で受け付けています。なお、会報等でのお名前の公表が不都合な場合は、払込用紙の通信欄にお書きください。

今ここに

じっとしていられない...

神戸市 円満堂 修治

私は神戸市に妻子3人で在住する27歳の男です。勤務先はエンジニアリング会社で鉄道車両の設計を職務としております。

自己の紹介はこの程度にしておきまして、先日新聞に『チコロナイ』のことが掲載されておりましたので、急ぎ資料を頂きました。そしてGEN入会、及びわずかながらもトラストに協力させて頂きました。このお手紙を書かせて頂きました理由として、結論から申しますとチコロナイの運動に積極的に参加させて頂きたいということなのです。お金を出すだけではなく、今ここにじっとしていられない気持ちなのです(チコロナイのことをもっと以前から知っていたら、と悔やまれます。第1回のワーキングツアーにもぜひ参加させて頂きたかった.....)

私は学生の頃より旅が好きで、とりわけ北海道には幾度も足を運びました。この都会に住む私にとって、あの原生林に自然に対する畏怖の念をいただきました。奥深い大自然の一部を初めて知ったような気がしました。またその大地の歴史を知るとき、そのあまりにも悲しい物語に怒りさえもこみあがってきました。もちろんアイヌと私たち日



本人との物語です。

私は以前より環境問題に興味があり、現在松木正氏が主宰する「マザーアースエデュケーション」（母なる大地の教え……アメリカインディアンの教えに基づく環境教育）のスタッフや、その方面のいろいろな講演などに参加したりしております。また、自分なりに今できること（子どもが小さいため）として本を書いています。そしてこの春には第1冊目『大きな木に伝わるお話』という本が一応ちゃんとした出版社から発売されます（とは言うものの半分自費出版ですが）。

これらの本で私が書きたいこと、いわばねらいは、この先数世代後のこの大地は今の子どもたち（大人たちにも）にかかっているということです。もっと具体的に申しますと、今の地球上の諸問題を解決していかなければならないのは他でもなく自分たちなんだという認識を持ってほしいということです。今の自分たちだけのことを考えていても十分に生活できる今日、その裏や過去にはどれだけの悲しい出来事や犠牲者がいるのか、また心で感じることもどんなに大切なことなのかということも取り込み、総合的な物語ができないものかと日々努力している次第です。今後もこの活動は進めていくつもりですが、そんな中のひとつの目標として、こんなことも考えています。それはあの教訓と自然との共生のことがぎっしりと詰まったアイヌ民話の現代版、それも都会の子ども向け版へのアレンジです。私たちの子どもたちがあの偉大なお話をすんなりと受け入れられたら素晴らしいと思います（まだまだ非力なため、到底手は着けられません。そ

れ以前に私は工学系ですので、気持ちばかりで力量がまるでそぐわないので一生無理かもしれませんが……）

二風谷には私も行きましたし、いずれは上記のことで萱野氏に手紙をお出ししようと考えていました。そんな時にこのコロナイの記事を目にしたのです。私はもういてもたってもいられなくなりました。こんな手紙ひとつで私のことなどまるで理解できないこととは思いますが、こんな私にできるか

ぎりのことをさせてください。（略）

私自身もミズナラやコナラなどを、狭い社宅のベランダで育てています。苗木になったものをいつの日か痩せた山に植えてやろうと企んでのことです。私は決して頭でっかちにはなりたくありません。私たち人間の手で破壊されていく、この全ての生き物たちの母なる大地をただ見ているだけや、叫ぶだけの傍観者にはなりたくないのです。たとえ微々たる力であっても……。

エスニック・コンサート・OSAKA

『自分さがしの旅』

～エスニック・ルーツをたどる旅人たちの魂が、
あなたを自分探しの癒しの旅にいざなう～

- 日時 2月18日（土）
18時開場 18時30分開幕
 - 場所 クレオ大阪北ホール
（阪急「淡路」駅下車8分）
 - 主催・お問い合わせ
エスニック・コンサート・OSAKA
実行委員会TEL.06-673-1795（住田）
 - 参加費
前売り3000円、当日3500円。高校生以下2000円
 - 出演
☆プカソコ
（ペルー出身のフォルクローレ・グループ）
☆加納沖andペウタンケ
（アイヌ出身の伝統的かつ前衛的アーティスト集団）
☆関西琉球舞踊研究所
（琉球古典舞踊、伝統芸能の関西第一人者）
☆劇団「波瀾世（パランセ）」
 - （コリア〔韓国・朝鮮〕語と日本語のバイリンガル劇団）
☆ホネ・マヌカウ
（ニュージーランドの先住民族マオリ出身のアーティスト）
- ◇message◇
“エスニックOSAKA・自分探しの旅”コンサート、どんな出会いがあるかな？と楽しみにしています。
今回実行委員会に参加させてもらって、民族的特性（エスニック・アイデンティティ）のなかに、本当に大切なものがあるのでは？と感じています。
異質な文化を認め合うことの大切さ、難しさなど、自分が知らない世界を体験しつつあります。
ぜひ、興味のある方は、総会終了後、コンサートに来てください。
（磯川佳子・GEN世話人）

私の本棚

『自立と共生—地球時代を生きる』
植田劭著 発行・樹心社／発売・星雲社 1700円

農業がカネやモノ中心の世の中に巻き込まれ自立性を失っていくことが、いかに農業に悲劇をもたらすか。本書は、高度成長経済以後の日本の農業に対する著者の思い入れを中心とした数々の寄稿文で構成されているが、今タイをはじめとするアジア諸国で推進されようとしている農業の近代化を考える視点をも提供してくれる。

著者は、高度経済成長期以降、現金収入を増やすために農家がおこなってきた化学肥料と農薬を利用する化学化、農業機械の利用による省力化、施設園芸、選択的拡大などの農業経営の合理化は、共生という「いのちの原理」を無視するものであるがゆえに、田畑の土の生態学的健康を傷つけ、農家の健康破壊、借金による「機械化貧乏」、嫁不足、後継者難という、農業の危機的状況を招来してきたとする。

このような状況への危機感から、現実社会を支配する金主主義の鎖からの解放が農業に希望をもたらすと確信した著者は、20年前に有機農産物の共同購入に着手し、以来、消費者不信の生産農家へ働きかけ、生産—消費の直結により表面化した矛盾をも、会員皆で克服すべき課題として積極的に対処してきた。

著者にとって、「有機農業運動」とは、単に安全性や栄養のために無農薬や有機堆肥による農産物を求めることではなく、「金で動く世の中を反省し、自分自身の生き方を改めつつ、生産農家と都市生活者が理解し合い、学び合う新しい関係をつくり上げたい。その結果、みんなが納得できる状況をゆっくりとつくっていきたい」という、「生産者の喜びを喜びとする消費者と、消費者の喜びを励みとする生産者の結びつき」への願いにもとづく提携運動である。そこに派生する協調関係(共生関係)とは、助け合い、補い合って進む優しさ、心と心で結ばれる「優気」ある関係であり、その運動で結ばれる

人びとの「有喜」ある関係である。自立した人間の互助協同の社会関係—。その関係を年月をかけて生み出す、つくり上げていく道筋に価値をおく著者の主張は、「利己主義」と「刹那主義」を特徴とするお金至上の「金主主義」へのアンチ・テーゼとして胸に響いた。(中原由美)

『人びとのアジア—民際学の視座から』
中村尚司著 岩波新書 620円

緑の地球ネットワークがまだ卵の力らをかぶっていた1991年秋に、中村尚司さんにアドバイスを求めた。環境問題と、アジアと日本の問題とをクロスさせて、実際にとりくみ、思索をつづけているまたとない大先輩だからだ。

中村さんは、緑の地球ネットワークにつらなる構想に基本的に賛成したうえで、「3つのキーワードがたいせつですよ。それは循環性、多様性、関係性ということです」と、具体的な例を示しながら、思うところを話してくれました。

あのとき、中村さんの賛成がなかったら、私自身がいまのような活動をはじめめることはなかったかもしれない。

GENの準備会が発足してまもないころ、中村さんをよんで、講演会を開いた。そのときも3つのキーワード、とくに関係性の重要さをめぐってたいへん示唆的な話をしてもらった。

黄土高原で緑化協力を具体化するとき、私はいつもあの「3つのキーワード」を思い浮かべ、中国の青年たちにも、それについての自分なりの理解を訴えた。小学校付属果樹園を構想したとき、植物見本園の建設協力を決めたとき……、いつも中村さんのアドバイスを咀嚼しなおした。

最近、岩波新書で中村さんの新しい本「人びとのアジア—民際学の視座から」が出た。ことわりもなく弟子を自称する私に、あれほど内容の濃い師匠の本の要約ができるわけがない。しばらく私は、相手かまわず、「あの本はすごいよ、読め、読め！」と言いつづけることだろう。

「3つのキーワード」もあの本では私が聞いた以上にくわしく書かれてい

る。しかし、言いたいことがあまりに多すぎるからだろう、数ページあってもいいことを、わずか数行で書きとぼしてしまう中村さんの言葉を、熟読玩味してほしい、と願う。

弟子たるもの、師匠との距離をつめ、いずれは追い越すことをめざすべきだろう。しかし、ものごとへのうちこみよう、考えの深さ、のちがいはどうしようもなく、差は開くばかりだ。

とりわけ、自分ならうちのめされてしまうであろう、あれだけの病いを、よりふかい実践と思索の原動力に変えられているのをみれば、脱帽する以外にない。

このような人を師匠と決めたことを誇りに思います。

(高見邦雄)

編集後記

阪神大震災にさいして、多くのみなさんからさっそくにお見舞いをいただきましたことに心からお礼を申し上げます。通信の混乱などで会員全員の安否は確認できておりませんが、阪神間に住んでいる主要なスタッフは、ケガなどもなく、救援活動などに元気ががんばっております。事務所はまったく損失がありませんでした。

被災地の会員その他のみなさん、がんばりぬきましょう！ 安否の問い合わせがこちらにもたくさんきています。ぜひご連絡をおねがいします。

ただ、日常活動のうえに救援活動などをかかえ、事務処理などに一部遅れがでております。ここしばらく、いろいろ行き届かないところもあるかと思いますが、ご理解をお願いいたします。(高見)

「なにこれ、ゆれてる」と思う間もなく、ドサドサッと本が落ちてきて、すっかり埋もれてしまいました。幸いわが家は無事でしたが、テレビで神戸や伊丹駅の惨状を目にして、言葉もありませんでした。

阪神大震災関連の記事が入りましたので、「山西省の自然」は今号お休みさせていただきます。それでもページが足りず、文字ばっかりになってしまいました。ごめんなさい。(東川)